

# 衝撃が走った ジャガイモシロシストセンチュウ の発見

(有) TOMTEN 代表取締役社長  
山道 弘敬

8月19日、北海道網走市でのジャガイモシロシストセンチュウ（学名：Globodera pallida、以下Gp）感染確認の報告に衝撃が走った。ジャガイモ業界関係者にとっては寝耳に水の驚愕事件である。また一つ、ジャガイモの栽培で大きな障害を抱えることになるのか。

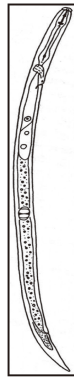
それにしても、農林水産省が同日付けプレスリリースで「急速にまん延するおそれはない」と発表した根拠は一体なんなのか。今回発見されたものとは異なる種類のジャガイモシロシストセンチュウ（学名：Globodera rostochiensis、以下Gr）では毎年のように新しい感染の報告が続き、北海道内のジャガイモ主産地に非汚染地帯を見いだすことが難しいほどに感染が進もうとしている。一部地域では見つかることが心配で、検査することそれ自体が恐ろしいという声さえある。

2006年4月13日、米国・アイダホ州東部のジャガイモ加工場に付属する選果場で採取されたTare（ジャガイモに付着していた土砂）の中からGpが確認された。これは米国での最初の発見であった。選果場での土壌採集は毎日行なわれているが、1週間分を混合してまとめてアイダホ大学センチュウ研究室で検査することになっていた。

## ジャガイモシロシストセンチュウについて

英名： White potato cyst nematode

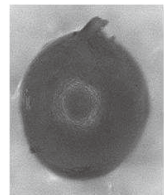
学名： *Globodera pallida*



幼虫



雌成虫（白色） シスト（褐色）



シスト

提供：農林水産省

農林水産省は8月19日、北海道網走市の一部圃場でジャガイモシロシストセンチュウ（以下、Gp）を確認したと発表した。国内では初めてのことになる。国外では、インドやヨーロッパ、米国、カナダ、コロンビア、ペルー、ニュージーランドなどで発生していた。

Gpが寄生したジャガイモは根の生育が阻害される。葉の縮れや黄化などの症状が見られてやがて枯死するため、収穫量の著しい低下を引き起こす。また、いったん圃場に侵入すると根絶は非常に困難とされている。

農水省では、発生範囲を特定するための調査の実施に加え、Gpが確認された地域で、これまで実施しているジャガイモシロシストセンチュウのまん延防止対策の徹底などを図っていくとしている。

Gp発見の余波はすぐ現れた。アイダホ州からジャガイモを輸入していたメキシコ、カナダ、韓国、そして我が日本もすぐにジャガイモの輸入を禁止した。折しも日本では、米国の長年の悲願であった日本へのポテトチップ用ジャガイモの輸出が解禁になったまさしくその最初の年にこの事件は起きた。

Gpが発見されたのはアイダホ州農務部が推進している定例検査のサンプリングによるものであった。重

要な輸出農産物に検疫害虫であるGrが皆無であることを証明するため検査である。前年の収穫時期から発見までの間に3500検体を検査した結果ではまったく確認されなかった。

米国農務省（USDA）と植物保護防疫プログラム（PPQ）はアイダホ州農務部と協力し、サンプルの履歴確認を猛烈な勢いで開始する。第一報の段階では感染圃場は特定されなかった。この第一サンプルの出所を

突き止めるのにアイダホ州ではじつに大変な労力を注ぎ込むことになった。

最初の圃場が特定されたのはG P 発見からほぼ2カ月経った6月13日のことであった。第二の感染圃場が見つかったのはそれからさらに1カ月後。その間の3カ月間に検査された土壌サンプル数は7355にも上ったが、陽性と判断されたのはたったの2圃場でしかなかった。しかしながら、もっと驚くべきことはこれだけの検査を行ない、地域が厳重な監視下に置かれているにもかかわらず、感染圃場の発見は今日なお継続していることである。昨年発見された3圃場を加えると、このほぼ9年間に発見された感染数は26圃場、1172 haに上り、いまなお3130 ha余りの圃場が規制の監視下に置かれている。そして、この26圃場の感染確認のためにアイダホ州で検査された土壌サンプルの数はゆうに50

万を超えているのだ。

たった1つのサンプルの出所を決つづけるのにさえ、9年にわたる歳月と50万を超えるサンプル数を検査しても、これで終わりと言えない状況が続いている。アイダホ州ではいまなおフルタイムで30人、季節労働者が1000人、G P対策のためだけに働いているのである。

このような米国の実例をひも解き、感染の初期段階では感染圃場の特定すら容易でないことを考慮すれば、農水省の説明がただの気休めではないことは明らかといえる。すでに広範囲で感染しているかもしれない。まず、判断の根拠となる数値を示すべきであろう。一体何検体のサンプリングを行なったのか、感染圃場の密度はどれくらいであったのか、感染の由来はなんだと考えられるのか、何圃場を検査したのか、これからどれくらいの検査を行なおうとするのか。なんらの情報を開示す

ることなしに、安易な判断だけ優先する姿勢は福島原発事故のときとまったく変わらない。このような中途半端な姿勢が現在のG rまん延の現状を生んだ元凶そのものであると言っても過言ではないであろう。

米国でG Pが発見された翌2007年、カナダのアルバータ州で違う種類の（ゴールドン）ジャガイモシストセンチュウが米国に輸出する種イモの認定栽培圃場から発見された。米国の多くのジャガイモ生産州はカナダ産種イモに多大に依存しており、米国のジャガイモ生産者にとっては驚きのニュースであった。

カナダ政府の対応も米国と劣らぬほど迅速かつ徹底したものであり、密度の高い調査を行なって感染圃場を特定し、感染圃場の封じ込めに成功した。米国にとってもカナダにとってもカナダの種イモは非常に重要な意味を持っていたが、米国はアイダホ州での苦い経験から「カナダの土壌サンプルの検査数が足りない」と、カナダ政府の輸出解除宣言を容易に認めようとはしなかった。結局2年後に種イモの輸入を再開したものの、当初の検査数のほぼ6倍に達する4万7000検体を2010年に検査することとなった。

筆者は、G r・G P対策に長年取り組んできたオランダと関係が深

い。世界で唯一公式にG r・G Pを駆除するトラップクロープとしてオランダで登録されているロケットリーフ（緑肥）を日本に紹介してきた。これはいまのところ、日本でG P駆除に有効なことが証明されている唯一の作物ということになる。

オランダ人からは常日頃、G Pと（ゴールドン）ジャガイモシストセンチュウの両方に抵抗性を持つジャガイモ育種の難しさについて聞かされてきた。それだけにこのG P発見のニュースには焦りが募る。いままで日本が行なってきたG r抵抗性品種開発の努力を振り出しに戻し兼ねない。ここで、G Pの封じ込め対策を徹底してまん延を防ぐことができれば、ジャガイモ王国・北海道の後世に負の遺産を残さずに済む。別種のG rがひどくまん延してしまっている問題とは同列に考えるべきではない。

生産者もこのような危機的状況への対策を強く要請すべきである。それが問題解決を図るうえで最も大きな原動力になる。生産者の問題意識が手ぬるくては話にならない。すばやい対応を叫ばなければ、すぐに手遅れとなる。G rと同じ轍を踏むことは絶対に避けなければならぬ。

（8月31日投稿）

## 筆者プロフィール

1955年生まれ。農業コンサルティング企業(有)TOMTENの代表取締役社長を務め、農業エンジニアとして先端野菜貯蔵庫の空調設計を中心に活動。2013年から大型鉄製コンテナに入ったタマネギを大量に施設乾燥させるシステムパレーションシステムの提供を開始、業界の注目を浴びる。ポテトニュースジャパンウェブサイト(www.potatonews.jp)を運営するPotato News Japan(有)の代表編集委員で農業ジャーナリストの側面も持つ。北海道帯広市在住。